原著論文

母性看護学実習における臨地実習を受けた学生と学内実習を受けた学生の学びの比較

COMPARISON OF LEARNING BETWEEN STUDENTS WHO ENGAGED IN CLINICAL PRACTICE AND THOSE WHO ENGAGED IN ON-CAMPUS PRACTICE IN MATERNITY NURSING

坂　村　佐　知　・　佐　藤　理　恵

SAKAMURA Sachi,　　SATO Rie

キーワード：母性看護学実習、実習目標、臨地実習、学内実習、新型コロナウイルス感染症

Key words：Maternity nursing practice, Practice objectives, Clinical practice, On-campus practice, COVID-19

要旨

例年、約半年間行われる母性看護学実習は2020年度新から新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、実習形態の変更を余儀なくされた。本研究では、2021年度に臨地実習を受けた学生と学内実習を受けた学生の学びを比較した。学びの内容が実習目標に基づいた内容であったか、自由記述レポートを用いて評価し比較することを目的とした。

2021年度に母性看護学実習を履修した81名を対象に分析を行った。

結果、学内実習では看護過程の展開のように模擬患者でも実践可能な内容に関する記述が多く、臨地実習では五感を使って経験した内容に関する記述が多いという特徴がみられた。

学内実習群と臨地実習群で実習目標に使用された語句の使用頻度を比較すると、両群で6つの実習目標全てに関連した記述があり、学生が実習目標達成の視点を持ち学修できたと考えられた。今後は学内実習では経験しにくい内容の学修方法を検討し、学生への平等性を担保した実習内容の検討が必要である。

Abstract

Maternal nursing practice, which usually lasts approximately six months, had to undergo changes in form from 2020 due to the spread of COVID-19. In this study, we compared the learning of students who engaged in clinical practice in 2021 with that of students who engaged in on-campus practice. This study aimed to evaluate whether the content of the learning was based on the practice objectives, using open-ended reports.

The analysis involved 81 students who engaged in maternal nursing practice in 2021.

The results indicate that many reports in the on-campus practice group were related to content that could be practiced on simulated patients, such as the development of the nursing process, whereas several reports in the clinical practice group were related to content experienced through the five senses.

The frequency of use of words and phrases used in the training objectives in the on-campus and clinical practice groups were compared; the findings indicate that both groups had descriptions related to all six training objectives, suggesting that the students were able to learn from the perspective of achieving the training objectives. In the future, it will be necessary to examine methods of learning content that is difficult to experience in on-campus practice and to consider practice content that ensures equality for students.

Ⅰ．緒言

本学の母性看護学実習は、例年5月のゴールデンウイーク明けから開始され、11月初旬まで続く。

しかし、2020年度より新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、全国の医療関係職種の養成校同様、臨地実習中止を余儀なくされた。その後も感染状況により実習中断や実習時間の短縮、実習内容の変更などの対応を迫られている。2021年一般社団法人日本看護系大学協会の「COVID-19に伴う看護学実習への影響調査」によると、学内実習への変更については、全体の85.3％が行っている。また専門領域別では母性看護学（86.0％）が最も多いとの報告［1］もあり、対象と学生の安全を担保しながら実習目標を達成することが特に困難な領域であるといえる。

新型コロナウイルス感染症拡大下における実習目標が従来のままでは、目標達成が困難となることが危惧された。しかし、特に小児看護学や母性看護学は近年、少子化、分娩施設の集約化、ハイリスク妊婦の増加､看護系大学の増設などにより、実習施設や実習時間の確保が困難となってきている［2］。今後この状況がさらに加速する可能性を考慮すると、安易に実習目標を変更することが最善であるとは言い難い。

そこで、本研究の目的を臨地実習または学内実習を受けた学生の学びを比較し、学内実習の内容が実習目標に基づいた内容であったかを振り返ることとした。この検討は、新型コロナウイルス感染症拡大という予測困難な状況が持続する中で、実習再開を念頭に置きつつ、今後実習先での経験の差や、実習施設減少に対しても有用な検討内容であると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究は、母性看護学実習において臨地実習を受けた学生と学内実習を受けた学生の学びを比較し、学びの内容が実習目標に基づいた内容であったか、自由記述レポートを用いて評価し比較することを目的とした。

Ⅲ．用語の操作的定義

学内実習群：母性看護学実習の全ての時間を学内のみで学修した実習群

臨地実習群：母性看護学実習の実習時間中、半日以上病院で学修した実習群

Ⅳ．研究方法

1．実習体制

1）概要

母性看護学は、2年次前期に履修する母性看護学概論（1単位）と母性看護学援助論Ⅰ（1単位）と後期に母性看護学援助論Ⅱ（2単位)、3年次に母性看護学実習（2単位）で構成されている。

母性看護学実習は、4月の全体の学内実習後、5月から11月にかけてグループごとの臨地実習

を行っている。臨地実習期間は2週間であり、1週目は学内実習2日、母子支援施設半日、1週目から2週目にかけて病院実習5.5日、最終日が学内実習となっている（表1)。学生は1グループ5～6名であり17グループ編成、臨地実習指導者1名と担当教員1名が指導にあたる。実習施設病院は総合病院3か所、産婦人科を有する民間病院1か所の計4か所である。実習施設では、1組の母子を受け持ち、看護過程展開を中心とした実習を行う。

2）実習目的・目標

〈実習目的〉

妊娠・分娩・産褥・新生児期の心身の変化を理解し、対象に必要な看護を実践する能力を養う

〈実習目標〉

(1) 妊婦・産婦・褥婦・新生児の身体的変化、心理・社会的変化を理解する
- ①身体的変化の特徴を知る情報を収集できる
- ②心理・社会的変化の特徴を知る情報を収集できる
- ③妊婦・産婦・褥婦・新生児の特徴が理解できる

(2) 母子とその家族の個別的な看護アセスメントを学ぶ
- ①対象者の看護に必要な情報を収集できる
- ②情報を基に総合的なアセスメントができる
- ③ウェルネスの視点で診断し、看護目標を設定できる
- ④目標達成のための看護計画が立案できる
- ⑤看護技術を応用し、計画を実践できる
- ⑥実践した看護の評価修正ができる

(3) 看護過程を通して、母性看護の対象を理解し、対象に必要なセルフケアを中心とした看護支援を実践する
- ①妊婦・産婦・褥婦に対して、適切な看護ケアを実践できる
- ②新生児に対して、適切な看護ケアを実践できる
- ③看護ケアを正確に安全に実施できる
- ④実施した看護ケアを評価し、計画修正ができる

(4) 看護実践を通して、母子保健・医療チームの一員としての役割を理解する
- ①看護実践を通してチームメンバーの構成と役割が理解できる
- ②母子看護の役割と責任が理解できる
- ③周産期における継続看護の必要性が理解できる

表1．病院実習の日程と内容

	1週目				
実習日	月	火	水	木	金
実習場所	学内	学内	午前：母子支援施設 午後：学内	病院	病院
内容	実習オリエンテーション	・看護過程の復習 ・妊産褥婦のフィジカルアセスメント	地域母子支援施設の見学/看護過程の展開技術（新生児のフィジカルアセスメント）	病院/病棟オリエンテーション・	・機能別実習（保健指導見学・妊婦健診見学・産婦の看護等） ・受け母子の情報収集

	2週目				
実習日	月	火	水	木	金
実習場所	病院	病院	病院	病院	学内
内容	・受け持ち母子の情報収集 ・看護計画立案	・情報収集 ・実習目標、行動計画発表 ・看護過程展開（新生児・褥婦のケア）	・情報収集 ・実習目標、行動計画発表 ・看護過程展開（新生児・褥婦のケア）	・看護計画に沿った母子のケア（退院に向けての保健指導実施または見学）	実習のまとめ

④地域での母子支援のシステムが理解できる

(5) 実習を通し生命の尊厳や母性の尊重及びリプロダクティブ・ヘルスについて自己の考えを深める

①生命誕生の意味、生命の尊厳について考えることができる

②母性看護の視点からリプロダクティブ・ヘルスについて考えることができる

③実習を通して母性についての自分の考えをレポートにまとめることができる

(6) 看護学生として主体的に実習に臨むことができる

①事前学習を十分に行い、積極的な学習姿勢で実習に臨むことができる

②カンファレンスに積極的に参加できる

③倫理性に配慮し、看護学生として責任ある行動をとることができる

④看護学生としての態度・身だしなみ・言葉遣いに注意し行動ができる

⑤全ての記録提出において期限を守ることができる

3）学内実習の事例設定および方法

2021年度の学内実習は、病院実習と同様に実習2週目から紙上事例の母子を受け持ち、看護過程の展開の実習とし、実習目的と目標の変更は行わなかった（表2）。

学内実習の事例は初産婦Aと経産婦Bのシナリオを作成した。

学生は、産褥1日目（生後1日目）の母子を初産婦Aまたは経産婦Bを受け持ち、LMS（Learning Management System）上の基本情報（背景・妊婦健康診査結果等）、助産記録や経過表をもとに看護過程を展開した。

また、産後スケジュールや病棟スケジュールについてもLMS上から確認できるようにした。事例は最終的に児の正常からの逸脱パターンを、初産婦と経産婦それぞれに追加したため最終的には4事例となった。初産婦A①は、母子とも正常経過、初産婦A②は、新生児が生後3日目に正常から逸脱（高ビリルビン血症のため治療を受ける）する設定とした。経産婦B①は、母子ともに正常経過、経産婦B②は新生児が正常から逸脱（高ビリルビン血症のため治療を受ける）する設定とした。グループ内の学生が1～2名で4事例を均等に受け持ちグループ内でそれぞれの看護ケアを共有することとした。受け持ち2日目（産褥2日目）から、立案した看護計画に沿って母子のケアをシミュレーターまたは教員が演じる褥婦（母親）に実践した。また、学内実習開始前は、LMS上で前日から夜間にかけての母子の経過を把握し、その日の行動計画や看護ケアに反映できるようにした。

事例

初産婦A

33歳1妊0産、会社員、既往歴なし。家族は夫と2人暮らし。キーパソンは夫と実母。妊娠中の経過は順調。分娩経過は、妊娠39週1日、自然陣痛発来、分娩所要時間15時間32分、分娩第4期までの出血量482mℓ。出生児は、体重3260g、身長51.6cmの男児、アプガースコア1分後8点/5分後9点。出生時異常なし。外表奇形なし。母乳栄養希望。

経産婦B

29歳3妊1産、専業主婦、既往歴なし。家族は夫と3歳2か月の男児。キーパソンは夫（出張多い）と義母。妊娠中の経過は、妊娠中期に貧血があったが鉄剤内服により回復した。分娩経過は、妊娠38週4日破水（前期破水）後自然陣痛発来、分娩所要時間7時間13分、分娩第4期までの出血量372mℓ。出生児は体重2880g、身長49.8cmの女児、アプガースコア1分後9点/5分後9点。出生時異常なし。外表奇形なし。第1子母乳栄養（1歳まで）今回も母乳栄養希望。

2．研究デザイン

後方視的研究

表２．学内実習の日程と内容

	1週目				
実習日	月	火	水	木	金
実習場所	学内	学内	午前：母子支援施設 午後：学内	学内	学内
内容	実習オリエンテーション	・看護過程の展開 ・妊婦のフィジカルアセスメント	地域母子支援施設の見学/看護過程の展開技術(産婦のフィジカルアセスメント)	看護過程の展開技術(褥婦のフィジカルアセスメント)	看護過程の展開技術(新生児のフィジカルアセスメント)

	2週目				
実習日	月	火	水	木	金
実習場所	学内	学内	学内	学内	学内
事例設定日数	産褥(生後)1日目	産褥(生後)2日目	産褥(生後)3日目	産褥(生後)4/5日目	
内容	・受け持ち母子情報収集 ・看護計画立案	・情報収集 ・実習目標、行動計画発表 ・看護過程展開(新生児・褥婦のケア)	・情報収集 ・実習目標、行動計画発表 ・看護過程展開(新生児・褥婦のケア)	・情報収集 ・実習目標、行動計画発表 ・看護過程展開(新生児・褥婦のケア)	退院支援発表 実習まとめ(学びの会)

３．調査対象

2021年5月～2021年11月に母性看護学実習を終了した86名の中で、研究に同意が得られた3年生81名を対象とした。対象の選定基準は母性看護学実習を受講した3年生とし、除外基準を母性看護学実習の単位習得ができなかった者とした。

４．データ収集方法

2021年度に母性看護学実習を終了した3年生で適格基準を満たす学籍番号を抽出し、非連結匿名化したうえで、該当する自由記述のまとめのレポートから情報を収集した。

５．分析方法

学生が自由記述により学びを振り返った質的データはテキストマイニングを用いて分析した。テキストマイニングは、質的テキストデータを数値化し、数値データと同様に扱うことで、分析者の恣意的な解釈を回避することができる［3］分析方法である。テキストマイニングツールにはKH coder ver3.を使用した。学生が学びを振り返ったまとめのレポートをテキストデータとし、エクセルデータに変換後、分析を行った。分析にあたり、2021年度学内実習群と2021年度臨地実習群の2群に分類した。

はじめに、MeCabによる形態素解析を行い、分析対象となる文章を単語の単位に区切り、単語頻度分析で出現回数を分析した。次に品詞別の頻出語を俯瞰し、「母性看護学実習」、「褥婦」、「看護計画」、「看護目標」、「看護過程」、「退行性変化」等の39語を分割せずに抽出したほうが良いと判断し、それらの単語を強制抽出し出現回数を再算出した。本分析方法は、機械的な分析で恣意的にならないという利点の反面、例えば、「今回」、「ありがとうございました」など定型的に頻回にでてくる語句も抽出されるため、このような意味をなさない語句は除外した。

次に、同じくKH coderを利用して対応分析を行った。対応分析は、ともに質的データである2変量の関係を視覚的、数量的に評価し、カテゴリー間の反応パターンの類似性を布置図に表す［4］。さらに中心に寄った点ほど相対的な頻度が高い単語であることを示し、周辺に位置する点は特徴的な単語と考えられている［5］。布置される語の数が同じになるように、出現語の取捨選択し調整した。対応分析により2021年度臨地実習群と2021

年度学内実習群の2群で実習形態の違いによる学生の学びを比較した。

また、実習目標6項目の達成度を計量的に分析するために、2021年度臨地実習群と2021年度学内実習群の2群で特徴語上位100語以内に含まれ、かつ、実習目標各項目の特徴的な単語を重複しないように選択し、項目ごとにコーディングルールを作成した（表3）。このコーディングルールに従って、各個人のレポートを集計単位として単純集計を行った。

6．倫理的配慮

実習レポートは成績判定後に個人が特定されない形式で集計分析することを口頭で説明した。また、レポート不提出という形で参加拒否ができないため、研究参加の可否を記入した用紙を自由記述等提出時に一緒に提出してもらった。その際に拒否による不利益は一切生じないことを合わせて説明している。なお、本研究は所属機関の倫理審査を受け、承認後に実施した（承認番号0336）。

Ⅴ．結果

2021年5月から2021年11月までに母性看護学実習を学修した学生81名を対象とした。内訳は2021年度臨地実習群49名、2021年度学内実習群32名であった。

1．頻出語の分析

頻出上位20の抽出リストを表4に示す。2021年度学内実習群では上位から「新生児」、「学ぶ」、「必要」、「褥婦」、「看護」であり、次いで「母親」、「観察」、「行う」、「実習」、「考える」が続きこれらの語句で上位10語、100回以上の出現回数であった。2021年度臨地実習群では上位から「学ぶ」、「新生児」、「実習」が200回以上の出現回数であり、「褥婦」、「母親」、「行う」、「感じる」、「看護」、「観察」、「必要」の順で次いで出現し、これらの語句で上位10語、100回以上の出現回数であった。

2021年度の学内実習群、臨地実習群いずれも「新生児」、「学ぶ」、「実習」、「褥婦」などの語句が上位にあった。両群で上位20以内に重複していなかった語句は、2021年度学内実習群の「アセスメント」、「理解」、2021年度臨地実習群の「育児」、「指導」であった。

2．対応分析

2021年度学内実習群と2021年度臨地実習群の対応分析の結果を図1、2に示す。

2021年度学内実習群の結果は、第1軸（横軸；成分1）の寄与率は16.49%、第2軸（縦軸：成分2）の寄与率は10.97%であり累積寄与率は27.46%であった。結果1．頻出語の分析結果から得られた

表3．コーディングルール・ファイル

＊実習目標1
身体的変化 or 心理・社会的変化 or 変化 or 心理的変化 or 新生児 or 褥婦 or 妊娠 or 身体 or 分娩 or 産褥 or 妊婦 or 個別 or 心理
＊実習目標2
看護過程 or アセスメント or 看護目標 or 看護計画 or 情報 or 対象 or 技術
＊実習目標3
看護支援 or 実践 or 正確 or 看護実践 or 修正 or 評価 or ケア or 看護ケア or セルフケア or 実施 or 対象の理解 or 対象を理解
＊実習目標4
チームメンバー or 母子保健 or 継続看護 or チーム or 継続 or 地域 or 家族 or 退院 or 役割 or サポート or 支援 or 社会 or 資源 or 制度
＊実習目標5
生命の尊厳 or 母性の尊重 or リプロダクティブ・ヘルス or 生命誕生 or 誕生 or 尊重 or 母性 or 生命
＊実習目標6
安全 or 安楽 or 看護学生 or 責任 or 知識 or 演習 or 配慮

表４．2021 年度学内実習群と臨地実習群の学びの記述上位 20 語

2021 年度学内実習群		2021 年度臨地実習群	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
新生児	180	学ぶ	264
学ぶ	150	新生児	227
必要	137	実習	206
褥婦	136	褥婦	194
看護	133	母親	192
母親	127	行う	183
観察	118	感じる	179
行う	116	看護	150
実習	107	観察	142
考える	105	必要	141
変化	99	不安	131
感じる	95	大切	120
アセスメント	73	状態	110
退院	71	退院	108
理解	70	育児	106
母性	68	変化	103
大切	67	指導	99
不安	67	考える	96
状態	66	母性	94
情報	63	重要	87

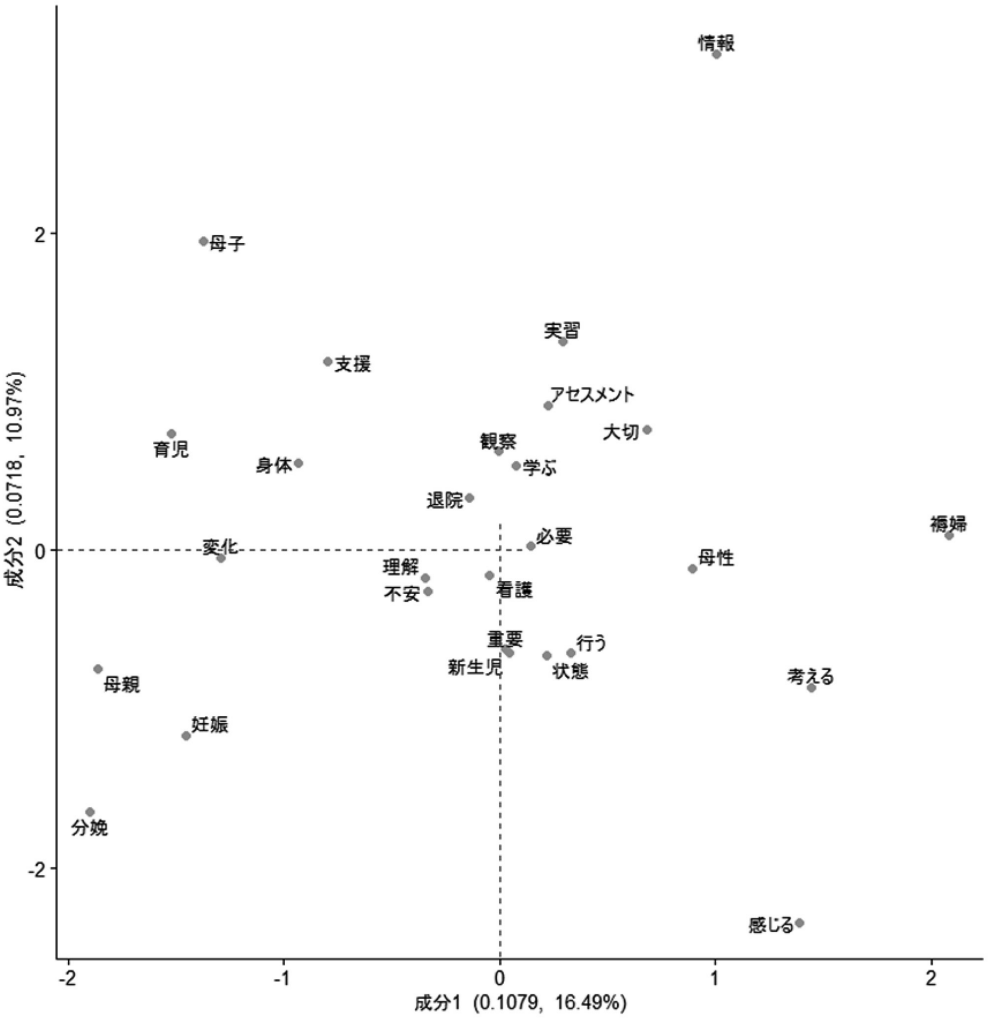

図１．2021 年度学内実習群の頻出語の対応分析

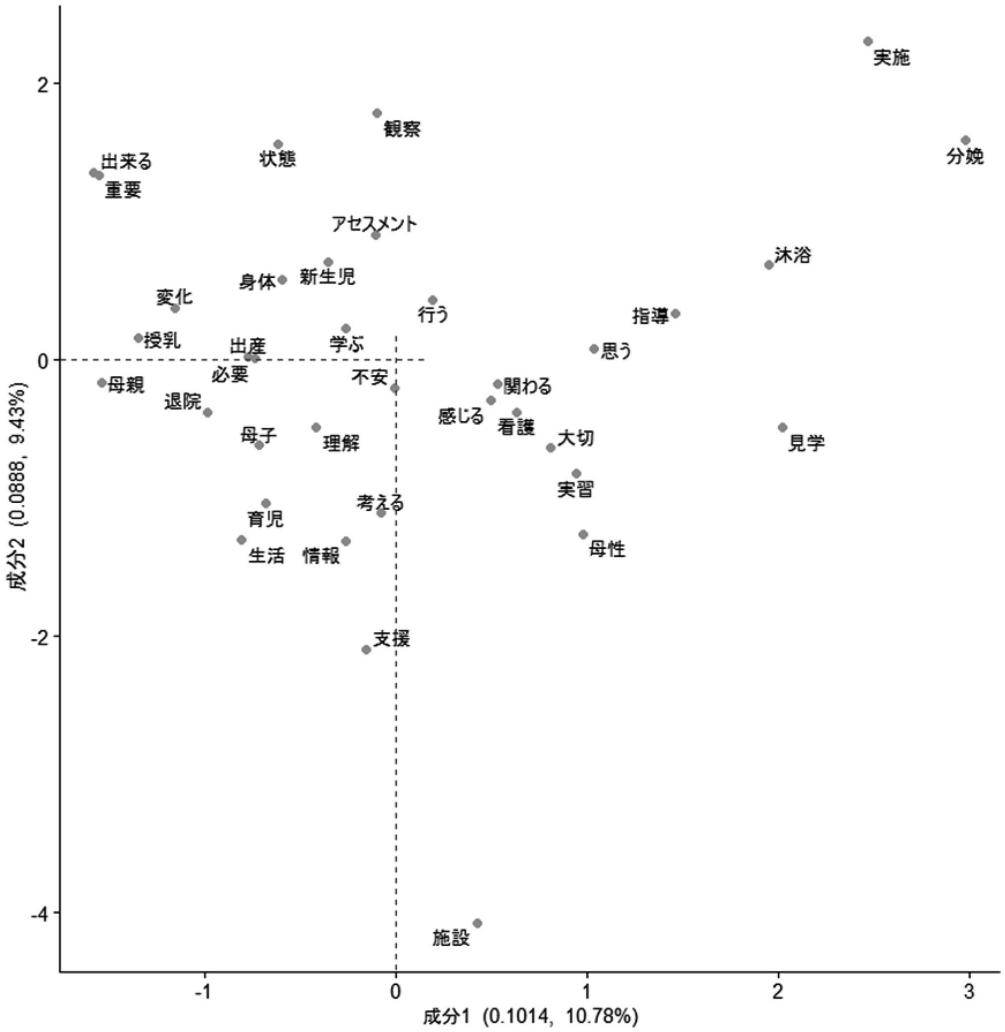

図２．2021年度臨地実習群の頻出語の対応分析

頻出語であった、「新生児」には「重要」、「行う」、「状態」が特徴語として布置されていた。「学ぶ」には「観察」、「アセスメント」、「大切」が、「母親」には「妊娠」、「分娩」が特徴語として布置されていた。

2021年度臨地実習群の結果は、第1軸（横軸：成分1）の寄与率は10.78%、第2軸（縦軸：成分2）の寄与率は9.43%であり累積寄与率は、20.21%であった。頻出語であった「看護」には「関わる」、「感じる」、「大切」が、「新生児」には「アセスメント」、「身体」、「行う」、「学ぶ」が、「母親」には「退院」、「必要」、「出産」、「授乳」、「変化」がそれぞれ特徴語として布置されていた。

次に、頻出語の中でも母性看護学実習に特徴的な語句である「新生児」、「母親」の近くに布置された語句を含む記述が、どのような内容であるかKWIC（Key Words in Context）コンコーダンスにて振り返った。　KWICコンコーダンスは、分析対象のテキストファイル内で抽出語がどのように用いられていたのか、という文脈を探ることができる方法である。学生の記述をみると、「新生児」に関しては例えば以下のように使用されていた。

≪2021年度学内実習群≫

学生1）『悪くもお互いに影響するものであるというのを、アセスメントを通して感じることができたと感じた。新生児と褥婦はそれぞれで考え、アセスメントするのではなく、必ず関連するものがあるため』

学生2）『母性では褥婦と新生児の両方の情報

をアセスメントしていくことが必要となる。そして何よりも重要なことは…』

学生3)『新生児については、日々のフィジカルアセスメントが重要であると感じた。新生児は子宮外生活に適応して…』

≪2021年度臨地実習群≫

学生4)『実習初日に生後24時間も経っていない、小さな声で泣き、一生懸命手足を動かしていた新生児を抱いた時には、今まで感じたことのない純粋な嬉しさが心の底から湧いて…』

学生5)『退院後を予測して支援していかなければならないと感じた。実際に新生児に触れ、身体が小さく軟らかく繊細で、命の尊さや生命誕生の意味について考えることができ…』

学生6)『一人一人に対して関わる時間を長くしており真摯に向き合っていると感じた。新生児に対しても愛情もって接している姿から、母性とは母親から子へのものだけでなく…』

また、「母親」に関しては例えば以下のように使用されていた。

≪2021年度学内実習群≫

学生7)『授乳時のポジショニングやラッチオンの仕方なども哺乳量に影響を与えるため、母親を含めたアセスメントを行い、観察することが大切であると学ぶことができた。』

学生8)『初めは、母性に関しての知識が自分に充分にあるのか、事例展開を通して母親・新生児に必要な看護計画が立案できるのか不安がありました。』

学生9)『今回の実習を通し、根拠を踏まえ観察を行うことの重要性、母親の身体的な変化を理解し看護計画を立案することの重要性を学びました。褥婦は…』

≪2021年度臨地実習群≫

学生10)『命の尊さと母親の偉大さを感じることができた。』

学生11)『出産することは母親も胎児も命を懸けて行っていると感じられた。これらの経験から、母性とは新生児…』

学生12)『母親は、乳頭痛や睡眠不足を訴えながらも、入院生活を一生懸命に過ごす。母親の姿はとてもたくましく、そのような母親に対し優しい声掛けを常に行い労う看護師の姿を見て…』

以上のように、2021年度学内実習群と2021年度臨地実習群で結果を比較すると、2021年度臨地実習群では、「母親」、「新生児」の近くに、看護実践や実際の母親を通して感じ取った語句が布置されていた。

対して2021年度学内実習群では、紙上事例の展開であったため、看護実践は学内実習で実践できる内容、例えば退院指導等の実践を意図的に設定した。さらに実践より看護過程の展開に重点をおいた。このため得られた患者情報をどのようにアセスメントするか、といった看護目標の設定および看護計画を作成するための状態の分析や看護計画の評価が中心となっていた。

3．コーディングルールによる比較

実習目標6項目に対しコーディングルールを作成し、実習目標6項目それぞれを特徴づける語句の出現割合を比較した。結果を表5に示す。2021年度学内実習群、2021年度臨地実習群どちらも実習目標1から6に該当する語句の記述がみられた。2021年度学内実習群では、実習目標1“対象の身体的変化、心理・社会的変化を理解する”32名（100%）、実習目標4“母子保健・医療チームの一員としての役割が理解できる”32名（100%）で全員の記述に実習目標1及び4に関連した語句が抽出された。2021年度臨地実習群では実習目標1“対象の身体的、心理・社会的変化を理解する”49名（100%）で全員の記述から関連した語句が抽出された。実習目標3“看護過程を通して対象に看護支援を実践する”で、2021年度学内実習群と2021年度臨地実習群に10%程度の差がみられ、2021年度学内実習群の方が、記述割合が低かった（75% vs 85.7%）。実習目標5“生命の尊厳や母性の尊重およびリプロダクティブ・ヘルスについて考える”では2021年度学内実習群

表5．2021年度学内実習群と臨地実習群の実習目標1～6の使用割合（N＝81）

	2021年度学内実習群（n=32）		2021年度臨地実習群（n=49）	
	人	%	人	%
実習目標1	32	(100)	49	(100)
実習目標2	31	(96.9)	44	(89.8)
実習目標3	24	(75)	42	(85.7)
実習目標4	32	(100)	45	(91.8)
実習目標5	31	(96.9)	40	(81.6)
実習目標6	21	(65.6)	33	(67.4)

の方が、記述割合が高かった（96.9% vs 81.6%）。実習目標6は実習態度を主な目標としていたため、2020年度学内実習群、2021年度臨地実習群いずれも他の実習目標に比べて関連する記述が少なかった。

Ⅵ．考察

新型コロナウイルス感染症拡大以前から臨地実習では、一組の褥婦と新生児を受け持ち継続的な看護実践を行っていたが、近年の少子化により困難な場合もあった。また、分娩に立ち会う機会も減少している。

さらに核家族化が進んでいる現在では、学生自身も新生児と触れ合う機会はほとんどなく、妊婦や新生児を育てる褥婦もなかなかイメージしづらいと考える。実習期間という短期間ではあるが、昼夜問わずに自分のことを後回しにしながらも授乳をする姿や、新生児をみつめる褥婦の姿をそばでみることは臨地でしか学べない、感じにくいことである。看護学における実習という授業展開は、体験を経験とする学習場面として極めて重要な意味を持つ［6］という報告からも、百聞一見の言葉通り、実際に視覚で捉えた経験は臨地実習での大きな学びではないだろうか。2021年度臨地実習群は、臨地実習ができても時間的な制約があり、通常よりも短い病院滞在時間となった。このため経験できる内容に物理的な制限がかかった。この制約の中で、新生児の観察と褥婦の観察、授乳指導は比較的どの実習施設でも経験できた学生が多かったため頻出語の上位に抽出され、新生児と母親に関連した語句が特徴語として抽出されたと考えられた。対象の生理的変化をアセスメントし、理解した上で観察するより先に、視覚で捉えた情報や印象が強く学びに影響したと考えられた。以上のように臨地実習では視覚的な印象の強さ、看護実践ができたということに関連した記述が多い結果となった。

とりわけ、分娩に立ち会う経験は学生にとって心に残る実習である［7］。2021年度臨地実習群で分娩に立ち会うことができた学生には、非常に貴重な経験だったといえる。一方、2021年度学内実習群において出産に関する学修は適切な教材がなかったため、出産前後をDVDにて視聴する形式で学修した。結果、視聴を通し、女性が妊娠、出産を通して経験する身体的変化、心理・社会的変化を学修し、生命の尊厳や母性の尊重について自己の考えを深めるという、実習目標5に該当する記述が2021年度臨地実習群より多くみられた。分娩の実際は学修できなかったが、分娩前後から生命の尊厳に対する学びにつながったと考える。

また、分娩の実際をDVDではあるが視聴することにより、生命や母性の尊厳について考える機

会がより得られた［8］という報告からも、実際に分娩の実際に立ち会うことが難しい場合、視覚的に代替される教材でも一定の効果が期待できるといえる。

今後は、特に分娩の実際に関しては教材等を吟味し、より学生にイメージしやすく、生命の尊厳や母性の尊重について気づきが得られる方法の検討が必要であるといえる。

次に、2021年度学内実習群では、教員がより臨地実習に近い経験をできるよう検討し、臨地実習で最も多く遭遇する対象を事例として提供したことについて考察する。妊娠、分娩、産褥、新生児期は生理的変化ではあるがダイナミックに変化し異常に移行しやすい時期である［9］。全学生に平等に、この対象に起こりうるであろう展開で、学んでほしい内容を意図的に組み込んだことが反映されたと考えられた。このため、実習目標1の妊婦・産婦・褥婦・新生児の身体的変化、心理・社会的変化を理解するに該当する“児の観察”、実習目標4の看護実践を通して、母子保健・医療チームの一員としての役割を理解するに該当する“褥婦の退院後の生活にむけた保健指導”に含まれた語句を含む記述が多かったと考えられた。

また、学内実習では臨地実習ではなかなか十分な時間をかけるのが難しい、看護過程の展開ができることに重点をおいた。このため、紙上事例での看護過程の展開を中心にアセスメントや観察が主な学修内容となった。紙上事例は前年度と同様のものを使用したが、教員側が臨地実習に近い経験よりは、看護過程の展開を主眼においたアセスメント方法や観察項目の検討を重視した結果が学生の記述に反映したと考えられた。一方で、実習目標3の母子とその家族の個別的な看護アセスメントを学ぶに該当する“母子を囲む環境を考慮した支援”に関する記述が2021年度臨地実習群より少なかった。これは実践対象がシミュレーターであり教員であり、学生自身が適切な看護ケアを行えたかどうかを評価することが難しかったためと推測された。

また、2021年度学内実習群の記述を俯瞰すると、複数の役割を担った教員の言い回しはそのまま学生に記憶されるという可能性が示唆された。

臨地実習では学生と教員の間に指導者が入り、様々な医療者の言葉遣いが記憶されるが、学内実習では学生と教員の二者関係しかなく、教員の発言がそのまま学生の印象に残り、学生の言葉となって記述されている可能性が示唆され、言葉の選択の難しさを感じる結果となった。本来、実習は妊婦、褥婦、臨床指導者、病棟スタッフなど様々な多くの人と接点があり、コミュニケーションをとることができる臨地実習が主となるはずである。しかし新型コロナウイルス感染症拡大による臨地実習の制限のため、学内実習の比重が大きくなると、多岐にわたる人とのコミュニケーションの機会も奪われる。新型コロナウイルス感染症拡大による実習制限に対する取り組みに関して、クリティカルケア領域（統合実習）・在宅看護学・老年看護学・母性看護学・慢性期看護学における先行研究では［10, 11, 12, 13, 14, 15］、様々なオンライン実習の取り組みについて述べられており，ペーパーペイシェントを用いた看護過程の展開やロールプレイング, Video on demand（VOD）システムや模擬患者の活用，オンライン会議システムを用いたカンファレンスの実施といった工夫がなされていた。現在、看護学教育で活用されている模擬患者の種類は、標準模擬患者と一般模擬患者であるとされている［16］。どちらの模擬患者でも、使用する言葉や表情から学生が情報収集することで、教員が複数の役割を担うことを回避し、これにより偏った印象や語句の選択を避けることができるのではないかと考える。また、学内実習でも教員以外の人とコミュニケーションが図れることで、緊張感を持つこともでき、模擬患者から得られるフィードバックも学生には貴重な振り返りの機会となると考えらえる。

2021年度学内実習群、2021年度臨地実習群の両群において、6つの実習目標にかかる語はおおむね抽出された。学生の自由記述であるため、実習目標が達成できたかどうかの直接的な評価にはならないと考える。しかし、特に実習目標1～5

で記述割合が高かったことから、学生が実習目標達成の視点を持ち学修できたと考えられ、学内実習の内容は実習目標に基づいた内容であったと考えられた。

Ⅶ. 研究の限界と課題

今回の研究は学生の自由記述を使用したため、実習目標が達成できたかどうか正確に評価することは難しい。また、臨地実習群でも経験できる内容に差があるため、一律に臨地実習群として学内実習群と比較することが正確な比較方法であるとはいえない。

新型コロナウイルス感染症が終息しない場合、実習時間短縮や患者との接触が限定されるなどの制限がある中で、看護実践能力を高める効果的な学内実習方法の検討は必要であると考える。さらに、今後少子化や分娩施設減少による臨地実習時間や実習施設確保が困難となる可能性や、ますます実習施設間で経験できる内容に差が生じる可能性が否定できず、学内実習内容のさらなる精練が求められると考える。また臨地実習とは異なり、学内実習は学生と教員の二者関係の中で行われるため、より臨床に近い環境設定を検討し改善していく必要がある。

Ⅷ. 結論

1. 2021年度学内実習群、2021年度臨地実習群ともに実習目標に基づいた内容であった。
2. 学内実習群と臨地実習群の学びを比較した結果、学内実習群は看護過程を中心としたアセスメント力を中心とした語句の使用が多かった。臨地実習群では実際に見学、経験を通した語句の使用が多かった。
3. 学内実習群では、学生に学修してほしい内容を意図的に設定することで目標を網羅した学びが行えていた。

文献

［1］ 一般社団法人日本看護系大学協会:「COVID-19に伴う看護学実習への影響調査」
https://www.janpu.or.jp/2020/12/11/17860/
(2022年5月1日引用)

［2］ 厚生労働省:看護基礎教育検討会報告書(2019)
https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf
(2022年5月1日引用)

［3］ 鳩間亜紀子，児玉桂子，田村静子:高齢者向け住宅改造の効果に関する介護専門職の評価指標と要介護度別特徴－テキストマイニングによる自由回答分析．社会福祉学．2004；45（2）：67-80.

［4］ 廣野元久，林俊克：JMPによる多変量データ活用術（2訂版）．海文堂出版，東京，2008，pp.129-146.

［5］ 濃沼正美，小池勝也，中村均:実務実習事前教育に向けたテキストマイニング手法の活用．薬学雑誌．2008；128：925-931.

［6］ 村井美俘，石川徳子，久保木由美：母性看護学実習の取り組み～臨地から学内へ～．神奈川歯科大学短期大学部紀要．2021；8：29-32.

［7］ 杉森みど里:看護教育学(第3版)．医学書院，東京，1999，pp254.

［8］ 一般社団法人看護教育支援協会:看護基礎教育・新カリキュラム改正後の母性看護学実習2019年10月15日
https://kango-support.or.jp/2337
(2022年5月1日引用)

［9］ 前掲［7］

［10］ 山本加奈子，加藤佐知子，森田敦子他:聖路加国際大学病院連携によるクリティカルケア領域の臨床実践の動画教材を活用したオンライン実習の試み．医学教育2021;52(2):103-108.

［11］ 佐野ちひろ，奈古由美子:在宅看護学における応用実践力の向上にむけた取り組みwith COVID-19．大和大学研究紀要（保健医療学部編）．2021；7：9-15.

[12] 岡田麻里，片山陽子，諏訪亜季子：対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価 －COVID-19感染予防対策を契機に実践した教育システム発展のために－．香川県立保健医療大学雑誌．2021；12：57-65.

[13] 山崎尚美，杉本多加子，上仲久他：感染予防に留意した新しい実習方法のあり方－Open CEASを活用した老年看護学オンライン実習の展開例－畿央大学紀要．2021；18（1）：79 － 88.

[14] 早瀬麻子，木下純子，田尻后子：オンラインでの母性看護学実習における学習効果．佛教大学保健医療技術学部論集．2021；15：29-44.

[15] 中村喜美子：成人看護学（慢性期）オンライン実習の試み．看護教育．2021；62（1）：50-55.

[16] 佐野望，中原順子，野田陽子他：模擬患者を活用した高齢者看護学演習に関する文献検討．共立女子大学看護学雑誌．2014；1：25-32.